

『プレイ・オブ・コンシャスネス』の抜粋の紹介

それは 1969 年の5月のことでした。グルデーヴ・シッダ・ピートウでは、夏はその頂点に達しており、非常に暑くてかげろうが立つほどでした。スワーム・ムクターナンダは、自叙伝を書くことを計画していました。

バーバ(スワーム・ムクターナンダは愛情を込めてこう呼ばれていました)が、本を書く計画をシッダ・ヨーギたちの1人に話した時、彼らはガネーシュプリーの強烈な夏の暑さの中でこの壮大な仕事に着手する代わりに、インドの西ガーツ山脈のマハーバレーシュワルを訪れるようにバーバに提案しました。山岳地帯にあるマハーバレーシュワルは涼しい気候なので、集中を要する仕事にはより助けになるであろうと思われました。このシッダ・ヨーギはそのような滞在を支援できる財政手段を持っており、それをささげました。

バーバはこの招待を受け入れ、このシッダ・ヨーギと他の数人と一緒に、マハーバレーシュワルへ車で旅しました。一行は5月 8 日に到着し、車が着いた時、空気は涼しく、そして朝霧が谷あい到低く立ち込めていました。その数日後、1969 年 5 月 12 日月曜日に、バーバは執筆を始めました。

それから 20 日間にわたってバーバは執筆しました——大部分は自ら手書きで、そして時々は2人のシッダ・ヨーギに本の一部分を書き取らせました。その一人はダーダー・ヤンデーでした。その本は出版されると全部でおおよそ 300 ページになるものでした。バーバは原稿を完成させると、マハーバレーシュワルに同行したすべての人を呼びました。彼らは式典を開き、そこでバーバは彼の本の名前、『チットシャクティ・ヴィラース』を明かしました。これは英語で『Play of Consciousness (意識の戯れ)』と訳されます。

『Play of Consciousness』は、出版されるとすぐに権威ある書物となり、シッダ・ヨーガの道の礎となりました——この本が独特で類いまれなのは、バーバ自身のサーダナーと達成の詳細を垣間見させてくれることです。

バーバがこの記念碑的な重要な作品を書いたから 52 周年を記念して、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトでは、バーバの本からの抜粋を特集しています。ここでは、「意識の戯れ」という表題の章からの抜粋を紹介します。

第 34 章

意識の戯れ

210—212 ページ

(日本語版では、第 1 部、第 25 節 229—231 ページ)

今でも瞑想に深く没入していくと、青い意識の光の束が見え、その中にブルーパールが見える。その柔らかくきらめく大いなる意識は、繊細な脈動と共に、私のあらゆる境地を照らし出す。食べたり、飲んだり、入浴している時、それは私の前に現れ、睡眠中でさえ、そこにある。今や私のビジョンは、二様性と一様性の柵を乗り越えてしまった。なぜなら、この光はその双方を等しく照らしてしまうからだ。そこには空間、時、物質の境界もない。霊妙に広がる青い光が、私と全宇宙にあまねく浸透している。私には、見えざるものさえ見えるのだ。マントラの香油を注がれると、隠された秘密の宝も見えてくるようになるのと同様に、シュリー・グルデーヴの恩恵と女神クンダリニーの祝福で、私の目に塗られた青い香油は、神聖なる実現をもたらした。その結果、通常は、霊妙過ぎて見えないものまで見られるようになったのだ。今、私は大いなる自己が宇宙として至る所に存在していることに一片の疑いも抱いていない。現象界という実体は存在しないし、実際にそのような実体は決して存在したこともなかったと完全に確信している。

我々が呼ぶ宇宙とは、チティ・シャクティの意識の戯れに他ならない。ソーハムを成す、サー「彼」とアハム「私」の意義が自ずから理解できるようになった。ヴェーダーンタで「汝(なんじ)はそれである」と説かれる知識は、その成果は絶対なる者の至福であり、私の内側で緩やかに振動している私自身の大いなる自己そのものなのだ。

『プラッテャビジニャーヒリダヤム』の格言では、至高なる自己であるシヴァの見地について、次のように述べている。

shrimatparamashivasya punah vishvottīrna
vishvātmaka paramānandamaya
prakāshaikaghanasya evamvidhameva
shivādi dharanyantam akhilam
abhedenaiva sphurati na tu vastutah
anyat kinchit grāhyam grāhakam vā
api tu shrīparamashivabhattāraka eva ittham
nānāviachitryasahasraih sphurati¹

これが意味するのは、神、パラシヴァ(パラメーシュワラともパラシャクティとも呼ばれる)にとっては、宇宙は存在しない。彼は、真なる者であり、永遠なる者。属性を持たず、形も持たず、至る所に浸透する、完璧なる者である。彼はシヴァから地球に至るまで、動と不動、顕現と隠れたるものを問わず、全宇宙を、彼と異なるところのない究極の至福の光と見ている。そこには彼のみがあり、見る者と見られるもの、主体と客体、個人と宇宙、物質と意識などの区別はあり得ない。神、パラシヴァの振動が、この宇宙に無数の形象を創り上げているだけのことなので

¹ Kshemaraja, *Pratyabhijñāhridayam* commentary on sutra 3.

ある。私は、この宇宙は神の体であって、パラマシヴァ自身が、自らの存在の中に宇宙として現れているのを感じた。

私に、この『プレイ・オブ・コンシャスネス』を書かしめた、ニャーネーシュワルの詩の最後の2節にこう書かれている。

tayāchā makaranda svarūpa tem shuddha

brahmādikā bodha hāchi jhālā

jñānadeva mhane nivritti prasāde nijarūpa

govinde janī pāhatā

ここで述べた、青い神の至福に満ちた本質こそが、神の真の姿である。これこそがブラフマー以降の、あらゆる賢人が経てきた体験だ。サッドグル・ニヴリッティナートウの恵みで見た、私の最も内側の姿は、至高なる神、ゴーヴィンダそのものだ。私は、至る所に彼を見る。

ヴェーダーンタでは、普遍の絶対なる者をおいては何も存在しないというが、それは真である。実際のところ、人生の目的とは、この神に対する知識を得ることであり、それを実現した時、人生はネクターに満たされたものとなる。この知識は、人間に欠くことのできない要素であり、シャクティパートを通してのみ手にすることができるものだ。すべての偉大な聖人は、シッダの恩恵をもって、神を自らの内に見ることができた。前述のニャーネーシュワルの体験は、それらのすべてを完全に代表するものである。この内なる大いなる自己こそ、ジャナカ、サーナカ、ナーラダや他の賢人たちによって発見され、何世紀もの間、偉大なる至福をもたらし、受け継がれてきたその知識の本質である。至高なる喜びに満ちた神、ゴーヴィンダを、いかなる者の内にも見ることができるのだ。悟りを得た者、無知なる者、愚か者、正気を失った人にかかわらず、誰の中にも彼を見ることができる。狂気や愚かさはマインドの状態にすぎず、大いなる自

己は常に完璧で純粹であるからだ。十六次元のカラーを超越した者は、常に、千枚のハスの
花卉の中央にあるブラフマランドウラを中心に住む。次のカラーは十七次元で、それが大いな
る自己の座である。ビジョンが完全に浄化されると、大いなる自己が青い色としてサハスラー
に見えるようになる。ニャーネーシュワルは言う。「この深遠なる秘められた真理を、私のサッド
グルの恩恵によって明らかにしているのだ」と。

真実、宇宙は神の戯れなのである。いたずら好きの大いなる意識が戯れる、チティ・シャ
クティの開花なのだ。チティを知らないがために、世界が現れるのだ。チティの知識さえ得れ
ば、全世界は霧散し、どこにでもチティだけが見えるようになる。

賢人ヴァスグプターチャーリヤは真にこう述べている。

iti vā yasya samvittih krīdātoenākhilam jagat

sa pushyan satatam yukto jīvanmukto na samshayah

この全宇宙を常に普遍的意識の戯れであると見る者は、疑いなく自己実現を遂げた者だ。
彼は、その肉体にあつて解放を遂げたのだ。²



© 2021 SYDA Foundation®. 著作権所有。

² Spanda Shāstra.